１　次の文章は、『新古今和歌集』所収の慈円の和歌に対する本居宣長の注釈である。読んで後の問に答えよ。　　　　　　　〈熊本大〉二〇一八年度出題

　　　政家百首歌合に、契恋　　　　　　　　慈円大僧正

ただ頼めたとへば人の偽りを重ねてこそはまたも①恨みめ

　「ただ頼め」は、とやかくと疑はず、ただひたすらに我が言ふことを頼めと、契る人に言ふなり。「②たとへば」といふは、未だそのことのなき時に、もししかじかのことあらむに、といふ時に使ふ言葉なり。この使ひ様、この頃のものには、ただの文にも折々見えたり。この歌にては、未だ偽りを重ねはせざるに、もしこの後偽りの重なることあらば、その時にこそといふ意なり。③ 「人」は、ここにては、我をいふ。彼方の上よりいへば、我は人なり。句は、「また」とは、上の「重ねて」といふにかけ合ひたり。されば、この歌は、人の恨むるにつきていへる意にて、今までのことはともかくもあれ、今より後はただ我を頼み給へ、この上、我が偽りの重なりたらむにこそ、またも恨み給はめといへるなり。る抄に、「たとへば」を、たとへば人に偽りあるとも、まづただ頼めと注したるは、はず。

（本居宣長『美濃の』による）

（注）　摂政家百首歌合……建久四（一一九三）年に開催された、藤原良経主催の六百番歌合のこと。

　　　　結句……慈円の和歌の第五句のこと。

　　　　或る抄……宣長が参考にした注釈書のこと。

問１　傍線部①「恨みめ」について、⑴「恨み」の活用の種類を記せ。⑵「め」を文法的に説明せよ。

問２　傍線部②について、宣長の説明する意味と同じ「たとへば」を、次の四つから一つ選べ。

ア　我が恋と君がつらさと比べんに山にたとへばいづれ高けん

イ　たとへば、雀の鷹の巣に近づけるがごとし。

ウ　まして思へたとへば西に生まるとも死なん別れは悲しかるべし

エ　たとへば、源三位入道の嫡子仲綱のもとに、九重にきこえたる名馬あり。

問３　傍線部③のように考えられるのはなぜか。本文に即して具体的に説明せよ。

◎問４　宣長の注釈を踏まえて、慈円の和歌を現代語訳せよ。

問５　次の作品のうち、勅撰和歌集ではないものを二つ選べ。

　　ア　万葉集　　　　イ　続後撰和歌集　　ウ　千載和歌集

　　エ　金槐和歌集　　オ　古今和歌集

【解答と採点基準】

問１　⑴＝マ行上二段活用

　　　⑵＝適当・勧誘の助動詞「む」の已然形

適当か勧誘か片方でよい。

問２　ウ

問３　Ａこれは恋人に自分を信じてくれと詠んだ歌なので、Ｂ相手からすると、歌の中の「人」は作者でしかありえないから。

Ａ＝５〔「恋人へ向けて詠んでいる」という内容であれば可。〕

Ｂ＝５〔「相手から」という内容がなければ０。〕

問４　Ａただひたすら私を信じてください。Ｂもし私があなたへの裏切りを繰り返したら、Ｃそのときこそ私を恨んだらいいでしょう。

Ａ＝４〔「信じてください」は「あてにしなさい」も可。〕

Ｂ＝３〔「もし・かりに～たら」という仮定の意味になっていないものは０。「繰り返す」という内容になっていなければ減点２。〕

Ｃ＝３〔「恨んだらよい」は「恨もう」「恨むだろう」と意志や推量で訳しているものは０。「恨んだらどうか」「恨みなさい」も可。〕

問５　ア・エ

【現代語訳】

　　　　摂政家百首歌合せで、約束する恋（を詠んだ歌）（作者）慈円大僧正

　問４ただひたすら私を信じてください。もし私があなたへの裏切りを繰り返したら、そのときこそ私を恨んだらいいでしょう。

　「ただ頼め」（というの）は、あれこれ疑わず、ただひたすらに私の言うことをあてにしなさいと、恋人に言っているのである。「たとへば」という語は、まだそのことが起こっていないときに、もしこれこれのことがあったら、というときに使う言葉である。この使い方は、近ごろの文では、普通の文でも時々目にしている。この歌では、まだ噓を重ねてはいないときに、もしこれから後噓が重なることがあったら、そのときにこそ（恨んだらよい）という意味である。「人」は、ここでは、自分をいう。あちらのから言うと、自分は人（ということになるの）である。第五句は、「また」とは、上の句の「重ねて」という語と呼応している。だから、この歌は、恋人が（自分を）恨むことについて言っているのであって、今までのことはともかく、今から後はただ私をお信じください、これから後、私の噓が重なったらそのときこそ、またお恨みになるとよいと言っているのである。ある注釈書に、「たとへば」を、もし人に噓があったとしても、まずただあてにしなさいと注を付けているのは、合っていない。